

	(遺跡名・調査の種類)	(所在地)	(調査面積)	(原因)	(調査期間)
1	仲3丁目 試掘調査	仲3-1-1	831	共同住宅建設	4/6～4/14
2	松山遺跡 試掘調査(1)	松山2-6-22, 23	567	駐車場敷設	4/17～4/24
3	西遺跡 試掘調査(1)	西2-1845	200	共同住宅建設	4/24, 25
4	上福岡貝塚 試掘調査	福岡2-1500-8	737	工場棟増設	5/2
5	松山遺跡 試掘調査(2)	松山2-4-7	571	駐車場敷設	5/6～5/11
6	松山遺跡第12次調査	松山2-3-11	393	個人住宅建設	5/12～5/20
7	松山遺跡第13次調査	築地3-2-18	234	個人住宅建設	5/18～5/30
8	松山遺跡第14次調査	松山2-5-17	432	個人住宅建設	5/21～5/30
9	松山遺跡 試掘調査(3)	松山2-3-31, 13	871.9	宅地造成	6/12～6/18
10	松山遺跡 試掘調査(4)	築地1-3-17	998	共同住宅建設	6/3～6/11
11	北野遺跡 試掘調査(1)	大原2-2079-1	617	駐車場敷設	6/19～6/22
12	滝遺跡 試掘調査	滝1-2-14	400	倉庫建設	7/6～7/8
13	北野遺跡 試掘調査(2)	北野2-1809-1	138	個人住宅建設	8/6
14	福岡新田遺跡 試掘調査	中福岡3 6 2	998	共同住宅建設	7/17～7/22
15	駒林遺跡 試掘調査	駒林字南原3 4 1	987.6	共同住宅建設	9/16～9/18
16	長宮遺跡第18次調査	長宮2-5-3	914.8	共同住宅建設	10/6～12/2
17	松山遺跡 試掘調査(5)	松山1-4-32	78.4	共同住宅建設	10/30
18	富士見台横穴墓 試掘調査	新田2-1-25	1112.5	共同住宅建設	11/18～12/1
19	西遺跡 試掘調査(2)	西2-2068-2	559.2	共同住宅建設	12/3～12/9
20	上野台3丁目 試掘調査	上野台3-1504-2, 1108-2	1915.2	図書館建設	1/12, 13
21	長宮遺跡第19次調査	長宮1-2-21, 35	467	駐車場敷設	12/17～1/22
22	川崎遺跡 試掘調査	川崎字山向9-5	168	店舗付住宅建設	2/18, 19



第1図 西遺跡調査区位置図 (1/5000)

次調査区の隣接地であって1次調査で確認された集落跡がどこまでつづくのか確認するために行なった。

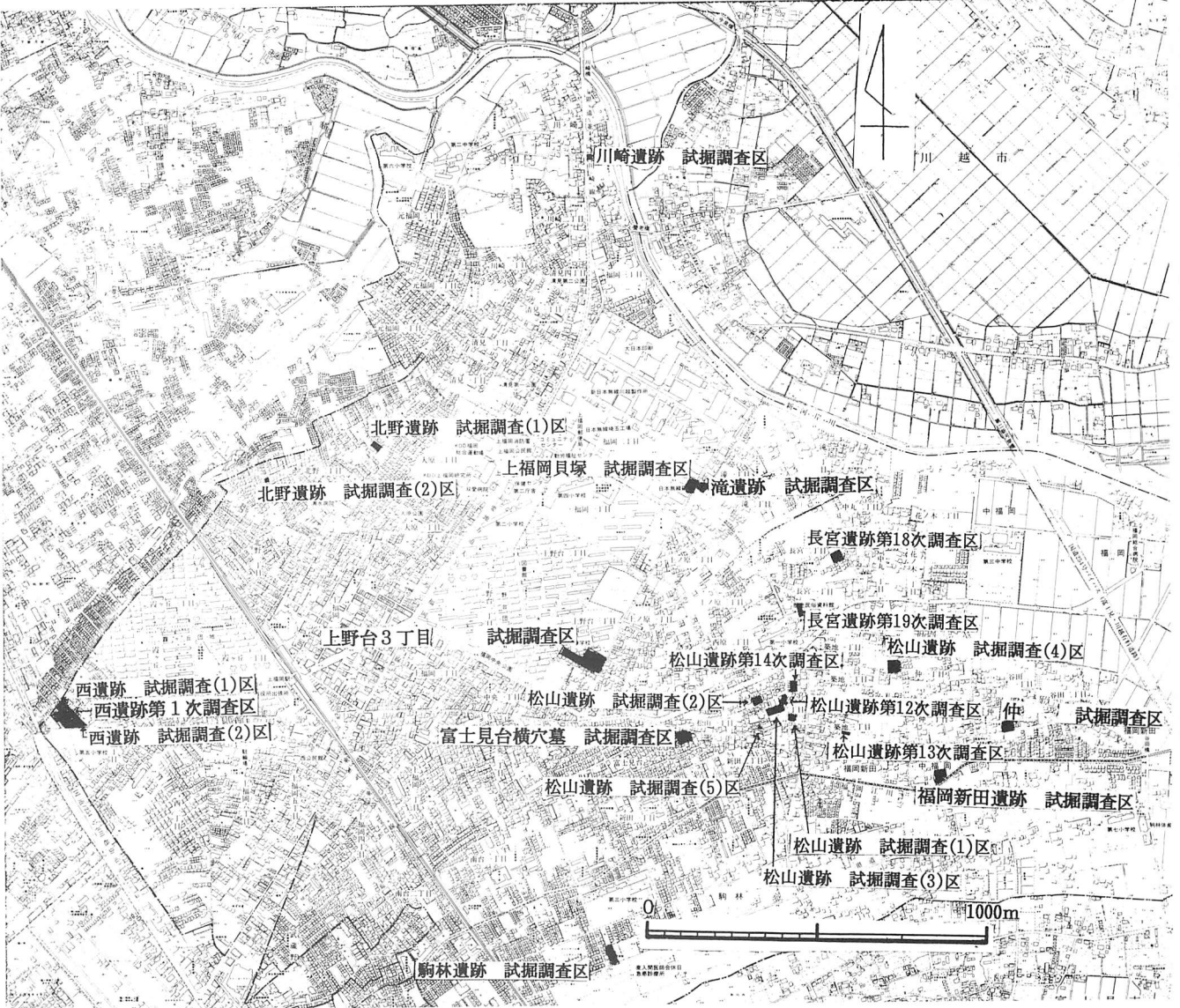


西遺跡 試掘調査(1)作業風景 (北より)

II 西遺跡の試掘調査

西遺跡は、北側に川越江川が西から東方向に流れ、比高差およそ5m程の崖線になっている台地上にあって縄文時代中期の土器片が散布していることで早くから知られていた。

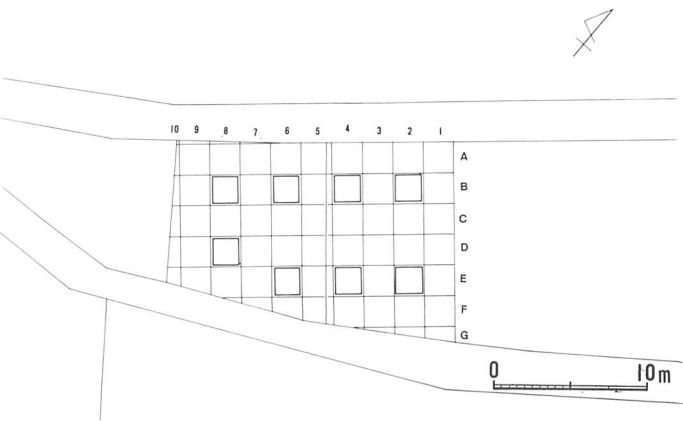
今年1月中旬からの上福岡市教育委員会による試掘調査と3月中旬から4月にかけての上福岡市遺跡調査会による本調査で縄文時代中期の前半を中心とした時期の住居跡が18基、土坑60基前後、集石17基遺構が確認された(西遺跡1次調査)。今回の試掘調査区は、2箇所とも1



第2図 遺跡位置図 (1/20000)

●西遺跡の試掘調査(1)

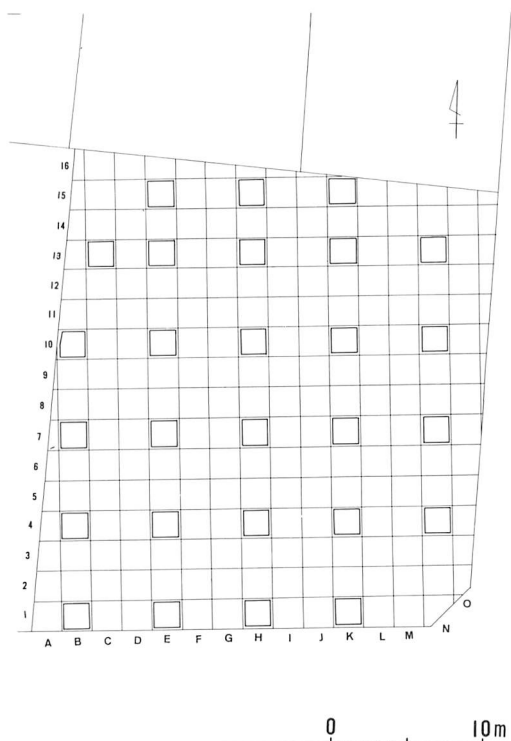
当該調査区は1次調査区の道路を隔てて北側に隣接している。地目は畑地であるが、現状は、駐車場代わりに使われている雑種地である。共同住宅に転用するという開発の申請があったので事前の試掘調査が必要であると土地所有者に連絡を行なった。調査は4月24日に東側土地境界を基準とし、2m間隔で北から南方向にA～G区、東西方向に第1～10区の方眼を設定した。B～2区より西側へ向かって1区おきに表土を除去し遺構の精査に努めながら、ローム面まで掘り下げようと試みた。D区列についても同様に1区おきに表土を掘り下げた。表土には5から10大のロームブロックが含まれており、黒味があった粘性をもつ土、コンクリート塊や駐車場に用いられる砂利などによく似た石もまじっていた。ローム面は5cm以下のロームブロックを敷きつめたような状態



になっていたり、ローム面の状況のよいところについても、遺構・遺物は確認されなかった。そのためこれ以上の調査は必要ないものと判断し、写真撮影、調査区の実測、埋め戻し、器材の撤収をおこない、すべての作業を終了したのは4月25日であった。

●西遺跡の試掘調査(2)

第3図 西遺跡 試掘調査(1)区全測図 (1/500)



第8図 仲3丁目 試掘調査区全測図 (1/500)

のはあまりにも有名である。縄文時代前期(おもに関山期)の集落跡や古墳時代の集落跡、さらには現在上福岡市史の編纂事業が行われているが、そのなかで権現山北古墳群と名付けられようとしている古墳群の存在にも言及しておられる。その概要は、郷土史料第2集にまとめられ、昭和40年に刊行されている。また奈良文化財研究所の先生方のご尽力によってその当時の資料が再整理され報告書が刊行されたのも記憶に新しい。上福岡貝塚は、新河岸川を崖下に望む台地の上にあり、他の時代の遺跡も周辺部に立地するなどの好環境にあった。今回の調査区は、昭和63年度に平安時代の住居跡4軒と古墳跡が見つかった調査区の南西約200mの地点にあたる。日本無線硝子株式会社が新しく工場棟を建設するというので、問い合わせがあり、社会教育課では台地が下ろうとしている地形であり、関山期の集落跡を落とした古地図によるとやや外れてはいたが、古墳時代～奈良平安時代の遺跡である滝遺跡の縁辺に接しており遺跡の可能性があるので試掘調査の必要がある旨を回答した。まず図面上で調査区の南側にある建物と土地境界にあたるコンクリート塀が直交する点を基準にして北側へ向かって2m間隔で第1～27区、同様にして向かって西側へA～O区の方眼を設定した。5月2日に重機にて南側からH I区列に該当する部分とB, C区列に該当する部分にトレンチをいれ、ローム面まで表土を除去した。その深さは2mを超えており、コンクリート塀の外側と比べて少なくとも1.5mの盛り土があると思われたが、本来の表土もかきまわしていたため区別がつかなかった。表土からは廃棄された硝子器具の破片、コンクリート塊などの瓦礫が大量



福岡新田遺跡 試掘調査作業風景 (西より)

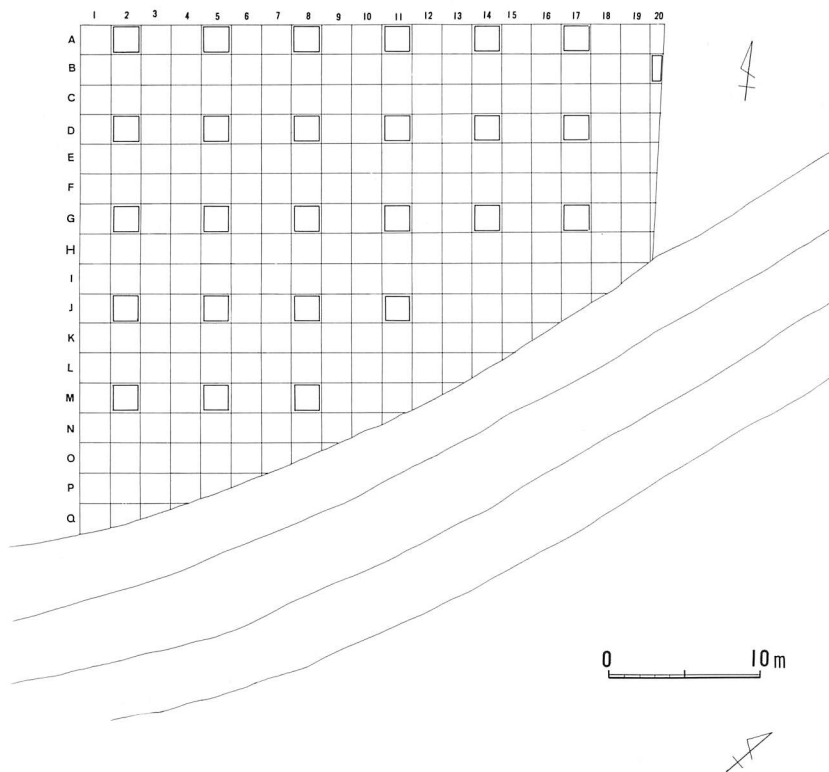


に詰まっていた、その下は直接ローム面に接していた。トレンチ内のローム面を精査していったところ、B, C区列のトレンチの中央部に焼土らしきものと茶褐色の土のある部分が見られた。その部分を精査しつつ、遺構らしきものの覆土を除去してみたところ、軟弱でありふかふかしていたうえに遺物らしきものは一切見られなかった。そのかわりにゴミが含まれており、また焼土についても限りなく現代に近いものであろうと

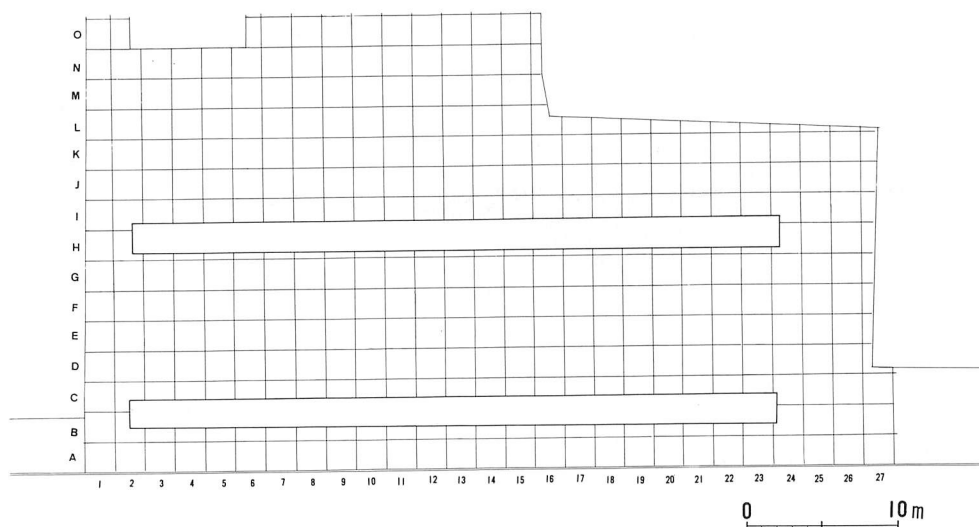
VII 松山遺跡の試掘調査

松山遺跡はこれまで、11次の調査と7回の試掘調査を実施してきた。その結果第1, 第2, 第3次調査で4軒の平安時代の竪穴住居跡を確認し、昨年度更に同時代の住居跡3軒を検出し、計7軒である。しかし地表面には、遺物の散布が見られないところ

上福岡貝塚 試掘調査作業風景 (南より)



第9図 福岡新田遺跡
試掘調査区全測図
(1/500)



第10図 上福岡
貝塚 試掘調
査区全測図
(1/500)

がほとんどなので遺跡の範囲については明確になっていない。

今年度は、松山遺跡の範囲と考えられた8箇所調査を行った。そのうち遺構を確認したのは3箇所（第12次、第13次、第14次調査区）であり、それについては別章で述べる。

●試掘調査（1）

当調査区は、昭和60年度平安時代の土坑5基、大溝1条、ピット11基の確認された第6次調査区の南隣であり第3号住居跡より70mほど南にあたる。調査は4月17日に北西土地境界杭を基準にして2m間隔で東側へ向かって第1～12区、同様にして南側へ向かってA～H区の方眼を設定した第2区列、第5区列、第8区列、C区列、

ジョン=ベルトを設定し、その覆土を除去していくと円錐を逆さにしたように壁面が傾斜していた。東側も覆土を除去していくと同様な壁面の変化が見られたので2つとも井戸であると推察された。始めの円形をなしている遺構を井戸2、東側の一部のみ確認したものを井戸3とした。井戸2、井戸3の調査後、調査区の実測、埋め戻し、器材の撤収をおこない、5月30日にすべての作業を終了した。

●井戸2

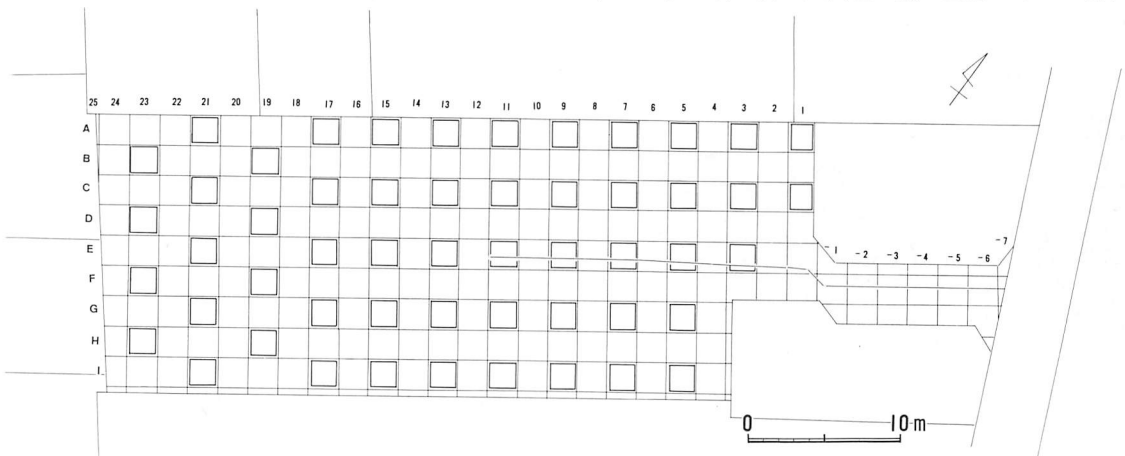
井戸2の覆土の状態は確認面より最初の90cm程はロームブロックや粒子を多く含む層と黒褐色の層が互層となって流れこんでいた。その下は粘性を含んだ灰黒色土層であり酸化鉄の粒子を含み下層へいけばいくほど水分と酸化鉄の粒子の量が増えていった。

井戸2の深さは確認面より2.2mであり、確認面での直径2.7m、確認面より90cm下の壁面が円柱状に変化する部分で直径1.1mであった。素掘りであり、木杵等を組んだ形跡はない。また周囲に上屋に伴うピットがあるか確認するため拡張を行ったが何ら見いだすことはできなかった。

主な遺物は、確認面より最初の90cm程までについては、龍泉窯系と思われる青磁碗の高台付きの底部や在地産須恵質甕の破片などが出土し、さらに110cm程で在地産軟質甕の破片が北側の壁面にそって、150cm程で同一個体とおもわれる甕の破片が上からみて覆土の中央よりやや南に傾いた位置で出土した。内面にはろくろ痕がみられ、表面にはろくろ痕の垂直方向にへらで削り整形が見られたので武蔵型の甕であろうとおもわれる。胎土は表面については暗オリーブ灰色からオリーブ灰色であり内部については明オリーブ灰色である。表面については明褐色灰色のものもある。浅野晴樹氏に年代については難しいが14～15世紀くらいだろうとのご教示をいただいた。また軟質甕と同じような深さで龍泉窯系の蓮弁文のついた青磁碗の胴部破片が見つかり、小俣悟氏に元代のものだろうとのご教示をいただいた。また平行叩きの付いた在地産須恵質甕の破片、同一個体と思われる頸部から口縁部にかけての破片等も見つかった。別個体の在地産須恵質土器破片もいくつか出土している。胎土の色調は明オリーブ灰色に近い。青磁片や軟質甕の年代から室町時代半ばごろに使われていた井戸であろうと推察される。しかし同時期の生活遺構が周辺で見つかっておらず周囲の遺構、また長宮遺跡の中世遺物や付近の中世遺跡との関連性について再検討を迫られる材料となりそうである。

●井戸3

井戸3は覆土が確認面より110cm程でロームブロックや粒子を多く含む層と黒褐色の層が互層となって流れこ



第17図 松山遺跡 試掘調査(3)区全測図 (1/500)



松山遺跡 試掘調査(3)作業風景 (北東より)

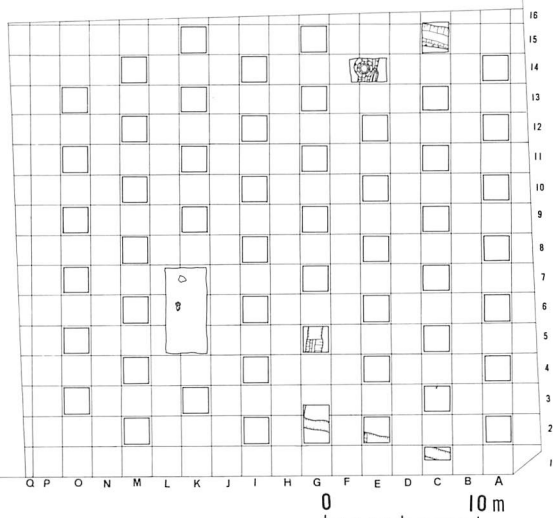
んでいる状況を確認したに留まった。構造は井戸2に近いものと推察されるが調査できたのが西側の一部のみであるため井戸の名称も便宜的なものである。遺物は確認できなかった。

XI 松山遺跡の試掘調査

●試掘調査(3)

当調査区は、松山遺跡第12次調査区の南西隣である。個人住宅と共同住宅建設のため分筆が行われるということが開発指導要綱事前協議書や農地転用についての文書で判明したので、社会教育課が、平安時代の集落跡と考えられる松山遺跡の範囲に

含まれ住居跡などが確認される可能性がきわめて強いと試掘調査が必要である旨土地所有者、開発担当者に連絡した。試掘の依頼は松山2丁目3-31の個人住宅についてのものが早かったが、3-13についても近いうちに共同住宅建設を行うときいたので2筆まとめて試掘を行うことにした。6月12日に松山2丁目3-31として分筆された区域の北西土地境界杭を基準にして2m間隔で東西方向に第1～25区、同様にして南側へ向かってA～J区の方眼を設定した。第11区列と第12区列の境界が3-13と3-31の分筆線に一致したので、11区列より東側へ向かって1区おきに表土を除去し、ローム面まで掘り下げた。E-11区より須恵器の口縁部から胴部にかけての破片が数点見つかったため、第1区列から第11区列までの埋め戻し、第13区列以降のグリッドの表土除去作業と並行して西側へ向かって土地境界杭に配慮しつつ拡張作業を行った。黒いしみ状の土を覆土にもつ穴などがみられたが、限りなく現代に近いものであるのは明白であった。この調査区の標

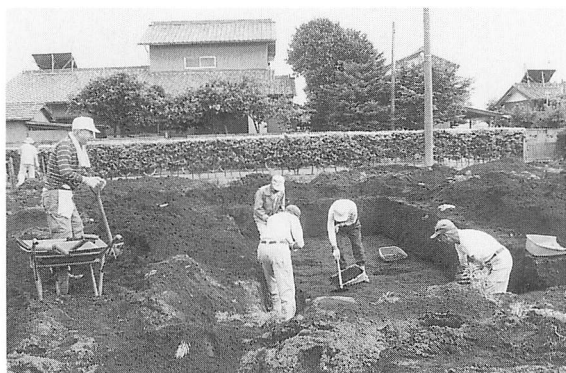


第18図 松山遺跡 試掘調査(4)区全測図 (1/500)

準土層は、ローム面まで約30cmを計ったものと考えられるが、微細のものから最大5cm程度のロームブロックが敷き詰められている層が表土の下に約30cm続いているため、傷のないローム面は60cmまで掘って確認した。東西方向に耕作によると思われる攪乱と推察され、深いものは1mに達する箇所も見られた。6月16日までに第23区列に達し、遺構については全く確認できなかった。そのためこれ以上の調査は必要ないものと判断されたので、18日までに調査区の実測、埋め戻し、器材の撤収をおこないすべての作業を終了した。

●試掘調査(4)

当調査区は、第8次調査区の北東100mに位置し、周囲を試掘していないためよく状態が判っていない箇所である。共同住宅建設の開発申請に伴い、松山遺跡の範囲を確認するために試掘調査を行うことにした。6月3日に南東土地境界杭のうち南



松山遺跡 試掘調査(4)作業風景 (西より)

側の道路に接しているものを基準にして2m間隔で西側へ向かってA～Q区、同様にして北側へ向かって第1～16区の方眼を設定した。図のようにA、E、I、M区列が偶数区列、C、G、K、O区列が奇数区列になり、かつ北側へ向かって1区列おきに表土除去作業を行った。この調査区の標準土層は、ローム面まで約80cmを計った。表土は暗褐色であって表面より約30cmは柔らかくその下の50のほうはややしまりがよい土であったが、1層であると思われる。C-1区、E-2区で溝を検出したのでG-2区を溝の延長を確認するために表土除去作業を行った。G-5区でも南北方向に走る溝が確認されたので、G-2区をさらに北側へ向かって拡張し、やや西側にも拡張を行った。G-3区部分で西壁直下に溝跡と思われるものを確認し、流路は、G-5区の溝につながるものと推察されたので、E-2区西壁と、G-5区南壁について溝の覆土を除去してみたところ表土の下にロームブロックを含む黒褐色土層、ロームブロック及びローム粒子を含む褐色土層、ロームブロック及びローム粒子を上層より多量に含む褐色土層の3層が確認でき、E-2区からH-2区の北東隅で溝が流路を北側に変えていることが判明した。

溝については、C-15区では東西方向、E-14区では南北方向に走っていることが確認されたので、溝の幅を確かめるため、C-15区はやや北側へ、E-14区はやや西側へ拡張した。E-14区では溝の西壁に確認面におけ